自説と異なる成功は偶然、
失敗は証拠にしがちだよね。

— PHOENIX愛知

Gemini Notebook

「クロスカットを打ってみて」
― ある助言への典型的な反応



不本意な成功

一度、二度とうまくいっても…
「たまたまだろう」

予想通りの失敗

一度でも痛い目にあうと…
「それみたことか。やっぱりダメだ」

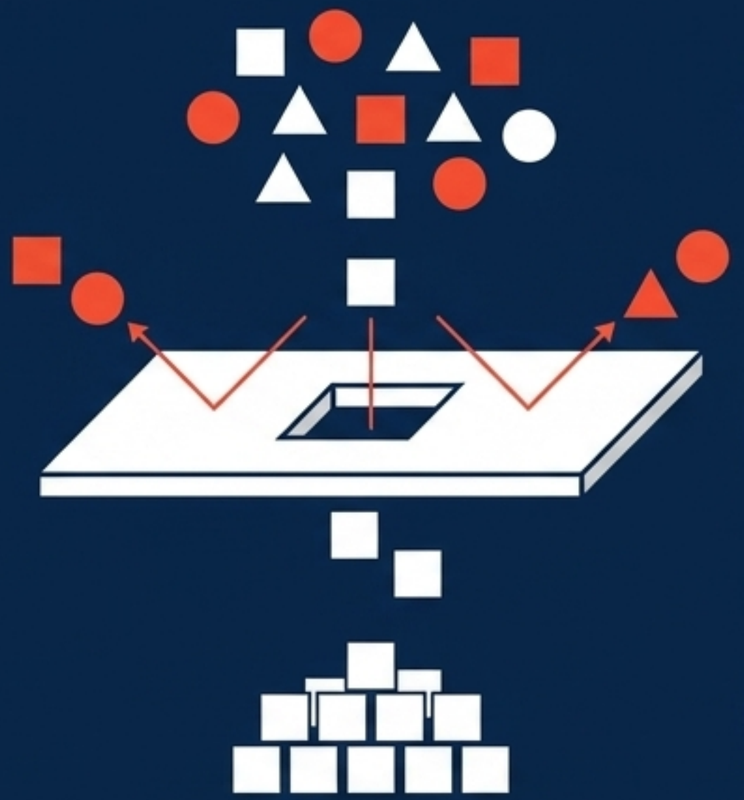
Gemini Notebook

私たちは、結果を「自説」に合わせて都合よく処理する。

自説との関係	結果：成功した	結果：失敗した
自説に反する	**ただの偶然** （検証の材料にせず、無視・排除する）	（該当なし・または自己正当化）
自説通り	（自分の実力の証明）	**ほら、やっぱり** （自説が正しい確固たる証拠として採用する）

Gemini Notebook

何度試しても、結論は変わらない。



行動から生まれる様々な結果

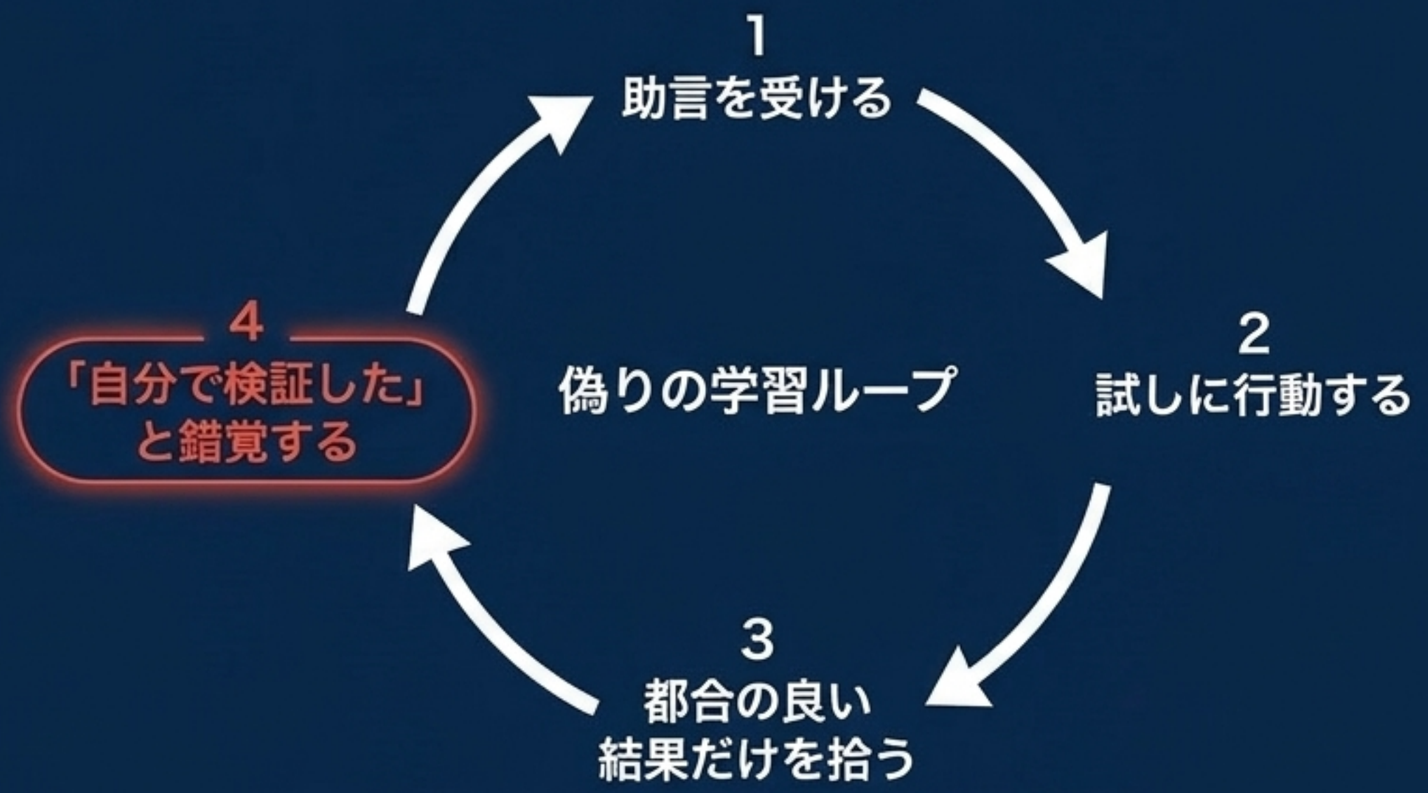
自分が正しいと思える結果

自説の強化

自分が正しいと思える結果しか、受け入れていないからだ。
成功は自説を疑う材料にせず、失敗は自説の証拠にする。
このフィルターを通す限り、どれだけ経験を積んでも思い込みは強化され続ける。

Gemini Notebook

最も恐ろしいのは「試していないこと」ではない。
試したのに、学びが起きないことだ。



本人は「実際に試して確かめた」と固く信じている。
行動だけ見れば学ぼうとしているように見えるため、自身の確かめ方の偏りに気づくことが極めて難しい。

Gemini Notebook

自分の判定を疑う必要があるのは、助言される側だけだろうか？

助言される側　　助言する側

あるブログ読者（レン）は、自身の応答を振り返り、ひとつの事実に気づいた。
「目の前の論点を十分に受け取る前に、私の側で『ここは補足・訂正すべきだ』と判定していた」

Gemini Notebook

「自分が正しかった」という満足感が、双方の問いを閉ざす。



受ける側の思考：
「ほら、アドバイス通りにやって失敗した」
（やっぱり私が正しい）

する側の思考：
「ほら、言った通りにやらないから失敗した」
（やっぱり私が正しい）

「それみたことか」と思う瞬間、そこには自分が正しかったという満足がある。
しかし、その満足で問いを閉じてしまえば、そこから先は何も学べない。

Gemini Notebook

失敗から学ぶのは易しい。

では、自分の思い込みに反して
「うまくいったこと」から学べるか。

Gemini Notebook

成長を分ける、二つのスタンス。

検証モード（NG）

目的：自分が正しいことを確認するために試す。

姿勢：証拠集め。

結果：不都合な成功を「偶然」として捨てる。

探求モード（OK）

目的：見落とした事実を発見するために試す。

姿勢：対話と探求。

結果：不都合な成功を「新たな学びの入口」として歓迎する。

Gemini Notebook

自分に都合の悪かった成功を、なかったことにしていないか。

自分が正しかったと確信する前に、見落とした事実へ戻る。その一手間を惜しまない対話を。



Gemini Notebook